



日本子ども学会 第2代理事長 榊原洋一先生を偲んで

2025年3月29日、榊原洋一先生が逝去されました。
謹んで哀悼の意を表し、心からの御礼を申し上げます

榊原洋一先生と日本子ども学会

学会をつないでいく決意

榊原洋一先生が小林登先生から日本子ども学会の理事長を引き継がれ、理事長に就任されたのは2013年10月のことです。

まず、榊原先生が張りきって取り組まれたのは、学会の運営を安定させることです。理事の人数を増やすこと、学会誌の質を高めながら年2回発行すること、会員数を800人にまで増やすことを目標に掲げられました。小林登先生の愛弟子の一人として、学会の運営を安定化して、継続できるものにご自身のご使命を感じておられたようです。

理事の人数を増やし、学会誌を年2回にする目標を達成。会員数800人はまだ実現していませんが600人を下回ることはありませんでした。毎年開催される学術集会の開催校についても自ら理事の先生方などに依頼し、大会を回していきました。榊原先生が理事長に就任されてからは、様々な面で組織が安定していきました。

難解な学会にはしたくない

榊原先生は海外の最新の論文に広く目を通されていて、子どもの課題に話が及ぶと、その内容を紹介し、私たちの蒙を啓いてくださることがしばしばありました。研究者の考え方を紹介するだけではなく、興味深い数値データも示して、事象の分析をされていました。誰もがその専門性の高さに多くの刺激を受けていましたが、榊原先生は日本子ども学会が専門家だけを対象とした閉じた学会になることを良しとしませんでした。学会の根本理念である学際性を重んじていたことでもあります。子どもと接する最前線の現場の人たちとの接点が希薄になるような難解な学会にはしたくないと、常に話されていました。

子どもの真実と向き合う

榊原先生は臨床医として発達障害の子どもたちの診療にあたりとともに、医学書だけではなく一般向けの啓発書も多く出版されていました。発達障害についての認知が広がったことを喜ばれている一方で、早期発見という名目で安易な診断が増えてきたことに懸念されていました。ある精神科医が、目線がうまく合わないというだけで自閉症という誤診をしたケースに触れ、その医者は発達障害の知識はあっても、子どもの専門家ではなかったのではないかと話されていました。「子どもは見知らぬ、偉そうにした大人と目線なんて合わせようとしないう」と笑っておられました。

榊原先生がエビデンスを重視されていたのは、科学的なデータをすべてと考える合理論者だったからではなく、小児科医としてチャイルド・サイエンスの複雑さを知っておられたからではないかと思います。簡単な決めつけはできないとして、その慎重さがエビデンス重視という姿勢につながっていたのだと感じます。

深刻にならずに、青空を探す

2020年、新型コロナが世界中を覆った時には、学術集会の開催を控えようという意見が大半だったのですが、榊原先生は「できれば多少無理をしてでも開催すべきではないか」と主張されました。それは榊原先生らしい姿勢だと思いました。

私たちの社会には、子どもをめぐる様々な課題があります。それがメディアなどを通じてセンセーショナルかつ深刻に語られることがありますが、榊原先生はそのような姿勢には一貫して批判的で、常に反発心をもたれていました。不安があると大人は子どもを管理する方向にもっていきたがるからです。

当初、新型コロナは子どもたちへの感染例がきわめて少なかったので、「だったら、子ども学会の関係者がひるむことはないではないか」と明るく語られていたことが思い出されます。榊原先生の口癖として「青空が見えた」という言葉があります。何があっても、常に「青空」を探す先生でした。

子どもへの深い信頼

榊原先生は子どものレジリエンス（困難に適応する力）に強い信頼を抱かれていました。常に真実を知る努力をして、それを乗り越えようというのが、榊原先生の一貫したポリシーだったように感じます。

近年は特別支援教育に対する批判を展開していましたが、それは子ども同士の関係が障害のある子どもの発達を促すよい環境だと思われていたからです。大人が寄り添うことも大切だけれど、それ以上に子ども同士が紡ぎ出す関係こそが子どもの発達を促すのだと力説されていました。子どもに対する信頼感、生命に対する信頼感というのは、榊原先生を語る上で外せないキーワードだと思います。

小林登先生へのオマージュ

2023年に、小林登「子ども学」賞が創設されました。榊原先生は恩師の名前が冠された顕彰制度ができたこ

とを大変喜ばれて、学会誌に小林登先生へのオマージュというべき原稿を寄せられています。

「小児医療をはるかに超えた視野と関心」「時代の最先端を透視する鋭い直感と実行力」「鋭い社会的感性」「飛びぬけた国際性と先見性」「多くの人を魅了する人間性」。見出しだけを拾っても、小林登先生への熱い思いが伝わってきますが、これらの見出しはそのまま榊原先生にも通じる言葉になっていないでしょうか。

論考の最後には、「今後もこの賞が、子どもに関わる様々な研究や活動を顕彰する賞として発展し、一人でも多くの子どもの幸せに寄与していることを祈念しています」と結ばれていました。私たちもその願いをつないでいきたいと思います。

木下 真（日本子ども学会事務局長）



PROFILE

榊原洋一（1951—2025）

日本子ども学会第2代理事長。小児科医、医学博士、お茶の水女子大学名誉教授。子どもの発達障害研究の第一人者。

1951年（昭和26年）12月15日、東京都武蔵野市吉祥寺で生まれる。都立西高等学校を経て、東京大学理科三類に入学。東京大学医学部を卒業後、附属病院小児科に勤務。ワシントン大学に3年間留学して脳内の脂質代謝の研究を行い、成果を博士論文とした。大学病院に戻ると臨床と研究に打ち込むなか、JICAの母子保健改善プロジェクト等、国際医療協力にも参加。医局長時代には、長期入院をしている子どものための院内学級を開校した。

2004年に社会人講座担当としてお茶の水女子大学に移り、人間発達教育研究センター教授となり、学生を指導。副学長をつとめて2016年に退任した。教職を退いた後は、医師の仕事に重点を置き、数多くの著作にも取り組んだ。また、チャイルド・リサーチ・ネットでは12年にわたって所長を務めた。

著書・共著に『集中できない子どもたち』、『発達障害と子どもの生きる力』、『発達障害のある子のサポートブック』、『発達障害の診断と治療 ADHDとASD』ほか多数。

趣味は、登山とクラシック音楽。音楽はオペラとピアノ曲を好み、作曲家ではブルックナー、ピアニストではグレン・グールドと内田光子の演奏を好んだ。ワインと芋焼酎も大好物。読書家でもあり、硬軟取り混ぜて並行して読んでいた。

日本子ども学会には設立から関わり、2013年から理事長を務めた。2025年3月29日、永眠。73年の生涯だった。

榊原洋一先生が日本子ども学会に寄稿された原稿の一部をご紹介します。

<学会HP『子ども学リレー』リレーエッセイ「私と子ども」より>

『私の子ども時代』

最も古い記憶は、幼稚園に初めて出かけた日の記憶です。東京郊外の畑の真ん中にある二軒長屋の玄関から幼稚園に出かけたときのイメージがまだ思い浮かべられます。

幼稚園は、青葉幼稚園という名前の、キリスト教系の幼稚園でした。父が単身アメリカに行っていたので、遠足のときなど園長先生が父親役を買って出てくれた思い出があります。

私は母が弁当を作ってくれていましたが、弁当を持ってこれられない子どもには、申し込むとパン屋さんがコッペパンを昼になると届けてくれました。種類はイチゴジャムかピーナッツバターの2種類のみでした。パンを入れた紙袋が紙飛行機を折るのに適しており、昼ご飯の後はコッペパン組の子どもは飛ばして遊ぶのが常でした。私はそれがうらやましくてたまりませんでした。やさしい顔の女の子が、そんな私の様子に気がつき、自分の紙袋を取っておいてくれるようになりました。なんともいえない嬉しさを感じましたが、これが最初に異性を好きになった経験かもしれません。

私は生まれつき強い近視であったために、幼稚園の視覚的記憶があまりありません。クリスマスの幻燈会も、その字のごとくぼーっとしか見えていなかったのではないかと思います。小学1年生のときに、黒板の字が見えていないことに教師が気づき、眼鏡を掛けるようになりました。初めて眼鏡を掛けて世の中のくっきりした像を見たときの驚きは、今でも鮮明に覚えています。

ぼーっとした幼稚園時代でしたが、心のトラウマとして現在にまで残る苦い思い出があります。幼稚園からの帰り道、道の真ん中に10円玉が落ちていたのです。母親から、お金を拾ったらおまわりさんに届けるように言われていましたが、近所に駐在所は無く、拾ってそのまま家に向かいました。家の前には食品や雑貨を売る「たかのさん」という店がありました。その前を通った時に、1個5円のガムが目に入り、握り締めていた10円玉を使ってしまったのです。母にとがめられた時に、口の中のガムが苦く変わったことを覚えています。お天道様の下で、恥ずかしいことをしてしまった、という悔恨の念は今でも残っています。

このように本当にぼーっとしない幼稚園時代でしたが、戦争が終わって10年近くが経過した子どもの私を取り巻く社会には、平和で温かな雰囲気が満ちていたと思います。

<学会誌『チャイルド・サイエンス』Vol.10より>

『理事長就任のご挨拶に代えて「子どもは未来だから」』

「子どもは未来である」という言葉は、日本子ども学会を開設された小林登先生が提唱されたものです。今回、小林登先生の後任をお引き受けすることになり、この言葉の意味をもう一度考えてみました。そして「未来」に想いをはせると、小林先生の言葉の意味するところが、ぱっと目の前に開けてみえたような気がするのです。それは、私たち大人（過去）と子どもたち（未来）という、異なった時間軸を生きてゆく人間同士の連帯と責任を表現したのが「子どもは未来である」という言葉であるということです。（中略）

日本子ども学会の役割は、未来の地球の stake holder である現在の子どもたちに成り代わって、今から未来を見通し、今から子どもたちのために（＝未来の世界の stake holder のために）子どもたちが生きてゆく社会や環境を変えてゆくことだと思います。

子どもより遠くを見通すことができると言っても、私たち大人一人ひとりの視野は狭く、目の前に広がる茫漠とした未来の一部しか見ることができません。多くの大人がそれぞれの視点を持ち寄り、より広いビジョンを得てゆくことが、日本子ども学会員の使命であると思います。透徹した広い視点をお持ちの小林登先生に代わることは私にはできませんが、理事をはじめとする多くの会員の皆様と一緒に、視線を少し上に向けて未来を見通して行きたいと思います。

榊原洋一先生のご逝去に寄せて

◆ 浅田 稔 (大阪国際工科専門職大学副学長、大阪大学名誉教授)

榊原先生、ちょっと早いんじゃないですか？ 小西先生もそうでしたが、自分自身も年齢的に近づいていて気が気でないです。もっともっと頑張ってたかったです。先生とは小西先生時代の赤ちゃん学会を通じて、専門分野が異なりながら、随分仲良くさせていただきました。

一番記憶に残っているのは、2004年シカゴで開催されたICIS2004で、夜一緒にカラオケに行き、先生の熱唱に圧倒されたことです。来世でも、熱唱されていると察します。先生のご冥福をお祈り申し上げます。

◆ 安藤寿康 (慶應義塾大学名誉教授)

あれはいつの大会だったか忘れたのですが、突然、榊原先生から「副理事長になってよ」と、こちらに躊躇を与えるスキがないほど親しげな言い方で声をかけられたのが、いまに至るきっかけでした。榊原先生とは二度、学会の宿泊ホテルのお風呂で、文字通り男同士の裸の付き合いをしたことがあります。そのとき学会への思いを本音で聞かせていただきました。ある日、学会の運営について頭を悩ませることがあり、これは榊原先生に相談しなければと思いながら池袋の駅のホームに降り立ったら、目の前に榊原先生が立っていたというシンクロシティもありました。山や音楽の話をもっとしたかった。ご冥福をお祈りいたします。

◆ 内田伸子 (お茶の水女子大学名誉教授、環太平洋大学教授)

私がお茶の水女子大学の総務担当理事・副学長をしていたとき、小林登先生がお茶大に訪ねてこられました。株式会社アップリカの社長がお茶大に「保育の寄附講座(教授2名の人件費と講座運営費)を寄附したいと言っている」ということでした。法人化したばかりで教員人件費を維持することが難しい状況でしたから、寄附講座はとてありがたいことでした。さらに、小林先生は榊原洋一先生を教授のお一人に推薦してくださいました。

お茶大では発達科学系教授を集めて拠点をつくり、21世紀COEプログラム「誕生から死までの人間発達科学」(内田伸子拠点リーダー)で5年間、続いてGCOEプログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」(耳塚寛朗拠点リーダー)で5年間、年に約1億の研究費を獲得しました。榊原洋一先生とは乳幼児発達の国際比較追跡研究で一緒にすることができました。

アップリカ寄附講座は5年間で終了しましたが、この大型科学研究費を獲得したおかげで教授ポストの人件費が捻出でき、榊原先生には生活科学部教授として留任していただくことができました。その後、笑顔をたやさぬお人柄と見識の豊かさ、判断的確さが教職員の支持を集め、研究担当理事・副学長としてお茶大に多大な貢献を果たされました。

榊原洋一先生の誠実で公正、何よりも優しいお人柄を慕って、大勢の学部生や大学院生が先生の門下として保育の研究に取り組みました。私も、クリニックで「発達しょう害」と診断されて

落ち込んでいる親御さんに榊原先生に再診断していただくようお勧めしました。榊原先生の高い見識と専門性に裏打ちされた心ある再診断を受けて、何人もの子どもと親御さんが救われました。チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)所長の榊原先生の巻頭言やご寄稿文は、子育てや保育について時宜を得た珠玉の文章ばかりで、毎号拝読するのが楽しみでした。これらを集めて『榊原洋一博士の育児書』として世の子育て中の親や保育者に読んでいただきたいと願っています。

発達科学者として、私は榊原洋一先生と同時代にお茶の水女子大学で一緒にできたことを誇りに思っています。榊原洋一先生に心からの感謝を捧げます。本当にありがとうございました。

◆ 太田美代 (環境政策対話研究所監事)

その明晰な頭脳にも、温厚なお人柄にも、こんな方がいるのか！と驚いてばかりの二十数年でした。さらに素敵だったのは、仕事や日々の暮らしを楽しみながら生きておられたこと。

ある時、愛用の万年筆が同じだとわかった、「インク、なに使ってる？ペリカンの“トパーズ”、知ってますか？とってもいい色で僕、大好きなの」と。まもなく、その美しい青のインクで書かれたお便りが届きました。

人生を楽しむ天才は、人を喜ばせ楽しませる天才でもありました。先生に出会えた幸運に感謝しています。

◆ 長田有子 (NPO法人チャイルド・ケアリング・アソシエーション代表)

榊原先生にはNPOの立ち上げの総会の時に、調布市の市民会館で講演をお願いいたしました。先生の「発達障害を持つお子さんとうまく向き合っていくか」をご講演いただきました。それから25年経ちますが、今現在も先生のご指導のもとに療育が続いております。どれだけ多くのお子さんが教育を受ける機会を設けることができたか、心より感謝申し上げます。

また、統合教育への指標も導いてくださいました。未熟ではありますが、先生のご意志を少しでも受け継いで実践していただきます。心よりお礼を申し上げます。先生ありがとうございました。

◆ 小林美由紀 (白梅学園大学名誉教授、小児科医)

榊原先生とは小林登先生が小児科教授だった東大病院時代に出会い、小児神経の中心的存在であり、研修医が初めて診療に向かう時の大切な心構えを教えていただきました。

先生はその後海外留学され、脳の老化や発達に関係するドリコールの研究をされましたが、世界を目指す姿が印象的でした。帰国後は医局長、病棟講師として、後進の育成に力を注ぎ、アジアと東大の若手小児科医が交流するCPAP事業では、子どもたちを支える道を共に考えていく機会を与えてくれました。

どの子どもの未来も誠心的に考えるという姿は、私にとって生涯の師となりました。

◆ 酒井 厚（東京都立大学人文社会学部教授）

榊原先生と初めてお会いしたのは、企業主催の縦断研究プロジェクトに参加した時でした。その当時、駆け出しの研究者だった私には遠く大きな存在であり、20年以上お仕事をご一緒させていただいた今もその印象は変わりません。

数年前の学会で、先生は「僕と酒井さんは友だちだ」と仰いました。友人関係の研究者として、こんなに励みになる言葉はありませんでした。思えばいつも、事あるごとに背中を押してくれていたんだと感じます。

帰国してお話したいことが沢山ありましたが、もうその機会がないと思うと残念でなりません。長きにわたりご指導いただき、本当にありがとうございました。

◆ 坂上浩子（子どもコンテンツ制作・研究者）

榊原先生には、子育て番組の制作で多くのご指導をいただきました。先生がスタジオに登場なさると、ママ・パパたち子育ての悩みを抱えておられる方々の表情が、一気に「安心～」のほっとした雰囲気になるのがいつも印象的でした。

「子育てしんどい」の気持ちが、「うちの子って、おもしろいかも」に変わる。それは、先生の専門的な知見だけではなく、子ども顔負けの「探検心」満載のお人柄、だったと思います。「子どもの発見」は「未知のワクワク」。榊原先生、ありがとうございます!!

◆ 佐藤朝美（愛知淑徳大学人間情報学部教授）

榊原先生とは、チャイルド・サイエンス編集委員長と副編集委員という立場で3年間お世話になったのをはじめ、CRNA（チャイルド・リサーチネット・アジア）や科研でもご一緒させていただきました。振り返れば、その一つひとつのやり取りの中で、論文に向き合う姿勢や大切にすべき視点を数多く教えていただきました。CRNAの調査では、わざわざ愛知淑徳大学までお越しくださり、直接打ち合わせをさせていただいたことも忘れられません。身に余るお言葉を頂戴したことは、今も恐れ多く、同時に心温まる輝かしい思い出として胸に刻まれています。

先生が大切にされてきた子ども学会を、微力ながらこれからも精一杯支えてまいります。どうかこれからも温かく見守っていただければ幸いです。

◆ 沢井佳子（チャイルド・ラボ所長、日本こども育成協会理事）

「私の生きがいは、小医たること」と、榊原洋一先生は「小医・中医・大医」の箴言をもとに、子どもを癒す仕事だけで十分に報われてきたと慎ましく振り返られました。2025年3月4日、千代田放送会館でのBPOの年次報告会に、杖をついて登壇なさった先生は、青少年委員会の委員長として「日本の文化を構成する要素である放送番組が、よりよいものになるように活動したい」と放送番組制作者へお話しくださいました。私のご一緒した最後の時間でした。

「子どもの周りの社会を変えよう」とお力を尽くす「大医」のお姿が、心に鮮やかに甦ります。

◆ 菅原ますみ（白百合女子大学教授、お茶の水女子大学名誉教授）

榊原先生に初めてお目にかかったのは2000年に開催された学会会場でした。一般人口中の子どもの精神病理に関する追跡調査という手間ばかりかかる地味な研究に対して、“とっても重要な視点だよ”と励ましてくださり、以来、いくつもの研究をご一緒させていただきました。

いつも太陽のような明るい笑顔で、膨大かつ緻密な研究レビューに基づいた確かなご示唆をくださり、どのプロジェクトもエンディングを迎えることが叶いました。

残された時間は限られていますが、先生のご指導で築けた貴重なデータの解析と発信に精一杯邁進いたします。

◆ 瀬尾知子（秋田大学教育文化学部准教授）

私がお茶の水女子大学の博士課程に進学し、榊原研究室で先生のご指導を仰いであら15年が経ちました。榊原先生は、どんなに忙しくても「学生指導も僕の大事な仕事だから」と、ニコリと笑いながら、温かくご指導をしてくださいました。榊原研の第1期のゼミ生だったので、他のゼミ生よりも長くご指導いただいたことを幸せに思っています。

榊原先生のように、子どもの幸せな未来を願って、誠実にそして深い愛情をもって取り組む研究者になれるよう、先生から賜りましたご指導を胸に、日々研鑽を重ねてまいります。

榊原先生にご相談をしながら準備をすすめておりました「第21回子ども学会議」。先生も一緒に参加してくださっているという気持ちで頑張ります。

◆ 高塩純一（びわこ学園医療福祉センター草津 理学療法士）

榊原先生から、アメリカの学会でSMA（脊髄性筋萎縮症）の少女が電動車椅子で自由に走り回っていた話を伺いました。

「高塩くん、身体は不自由でも、あの子の心は本当に自由だったよ。」穏やかに語られた先生の言葉は、私の心に深く刻まれました。後日、ご恵贈いただいた『アスベルガー症候群と学習障害』にもそのエピソードが記されており、Baby LocoやCarry Locoの開発に向けて私を大きく後押ししてくださいました。心より感謝申し上げます。



2023年12月に訪ねた滋賀県甲賀市の「やまなみ工房」では、地元の知的障害者だけで世界に誇れるアート拠点ができていることに感激していた。

◆ 所 真里子 (保育の安全研究・教育センター)

日本子ども学会創立10周年記念国際シンポジウム(2013年10月)の実行委員長は榊原先生でした。実質的に準備を始めたのは8月。先生は、アツという間に協賛金を集め、登壇者と打ち合わせし、人手を集め、抄録の翻訳までしていました。語学が堪能な先生が訳された文章は的確で読みやすく、「先生、完璧です。素晴らしい!」と絶賛しました。先生は「翻訳には関心があるんだ。専門書ではなく文学的なものをいつか訳してみたいと思っているんだ」と。

なんでもできて、やりたいことがたくさんあった先生でした。

◆ 仁木和久 (慶應義塾大学訪問研究員、脳認知科学研究所総括研究員)

榊原先生との出会いは「脳科学と教育プロジェクト」でした。脳科学と教育の審査等をしていた小林登先生から「日本子ども学会に入ったらいよいよ」とお誘いを受け、再び榊原先生とご一緒させていただき、多分野の方が集う居心地のよい学術交流の中で「子どもの学びと成長」をテーマとして研究活動をさせていただきました。

実は、榊原先生には大恩があります。定年後、当時、お茶の水女子大の副学長であった榊原先生のご支援を受け、大学の客員研究員として科研費研究・挑戦的研究(開拓)を申請・取得することができ、「生涯に渡る学びと成長」の研究総括ができました。

学年が違いましたが、同じ都立西校の卒業生でした。「西高の自由」を満喫した思い出、特に、ミス西校の話題、風紀取締の赤鬼の話に盛り上がったことを思い出しました。青春時代に共有した心のチャンネルを通して、最後にもう一度、先生の大恩に感謝し、御冥福を祈りたいと思います。

◆ 福澤利江子 (助産師、長野県看護大学准教授、共同研究員)

小林登先生の愛弟子としてチャイルド・リサーチ・ネットを引き継いでくださった榊原先生。直接お話ししたことはほとんどないままだったのですが、先生の所長ブログのファンでした。

2年前、長女が1年ほど不登校だったのですが、当時の榊原先生の「何か変だよ」の記事(<http://www.blog.crn.or.jp/chief2/>)を読むと、子どもへの優しさに満ちていて、言いにくいこともあえて声を上げて代弁してくださる先生の強さに救われ、子どもを信じる力をいただきました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

◆ 箕浦康子 (お茶の水女子大学名誉教授)

先生に初めてお会いしたのは、NHK放送文化研究所が2001年に発足させた“子どもに良い放送”プロジェクト(小林登代表の跡を継いだのが榊原先生)の共同研究者としてです。2025年3月発行の『放送メディア研究18』に掲載のこの12年間の追跡調査のまとめ「子どもと映像メディア」の1章として、先生は「DuPaulの不注意、多動・衝動性尺度の意味」を寄稿されています。絶筆ではないでしょうか。

また、国際医療協力研究委託事業「女性の地位及び育児文化の相違が子どもの発育へおよぼす影響：国際比較研究」(代表 小西行郎)に、文化人類学的な視点を持ち込んでほしいとお誘いを受け、榊原先生や彼の留学生のお世話で2002年12月に初めてベトナムの子どもを取り巻く環境の調査に研究グループの一員として参加しました。この委託は2年で終わりましたが、ベトナムでの就学前幼児のケアと教育の研究を私が続ける契機となったことを榊原先生に感謝しています。

◆ 宮下孝広 (白百合女子大学人間総合学部教授)

榊原洋一先生に初めて出会ったのは、小林登先生が主宰されていた、まだ小さな子ども学の研究会に参加された時でした。以来、今日まで、研究会・学会の研究面・運営面はもとより、あらゆる方面に発揮される先生の非凡な才能と、子ども学会の特色でもあるさまざまな立場の方々と分け隔てなく接していられるあたかな人柄に、目を眩るばかりでした。

小林先生の開かれた研究室の環境で伸び伸びと鍛えられ、さらにご自身でも研鑽を重ね続けて来られた方の力量を、半ば羨望のまなざしで追い続ける日々でした。心からご冥福をお祈りします。

◆ 村松志野 (元お茶の水女子大学 榊原研究室秘書)

小林登先生から日本子ども学会の次期理事長打診のお話があった際、「僕に小林先生の代わりが務まるのだろうか」と深く悩んでいらした姿が強く心に残っております。2代目理事長として小林先生のご理念を継承し、日本子ども学会の先生方と更なる発展のため、常に真摯にご尽力されていらっしゃいましたが、志半ばで旅立つことになってしまったことを誰よりも榊原先生が一番無念に思っていると存じます。これからは小林先生とご一緒に学会の飛躍をお見守りください。榊原洋一先生の御霊のご平安をお祈り申し上げます。

◆ 劉 愛萍 (チャイルド・リサーチ・ネット主任研究員)

榊原洋一先生の笑顔と、あふれる好奇心に満ちたまなざしは、今も心に鮮やかに残っています。海外が大好きだった先生は、生前、世界各国で子どもたちのために診療や講演に尽力されました。どんな場面でも自ら楽しみながら、まわりの人々を引き込んでおられました。

先生は子どもが笑顔なのは、今を素直に生きているからと言っていました。その言葉こそ、好奇心旺盛な先生ご自身の笑顔の源。子どもへの深い愛がそこにありました。



第1回小林登「子ども学」賞の贈呈式で受賞者に記念盾を渡す榊原先生。